苏吉采花图谱

三

1830
3

1830

前太平記圖會卷之二

目錄

經基上洛禁中行事怠慢
貞盛賜唐皮小烏下東國
諸社諸寺御祈禱節度使下向
貞盛下著武藏國秀郷同意
宇都宮合戰將門敗北
御厨三郎將頼討死
古河合戰嶋廣山落城
辛嶋合戰武藏五郎貞世討死
相馬内裏兵火將武討死

平將門戰死諸將討死

權守興世被生捕

宦軍上洛賜恩賞

將門首懸獄門秀郷射百足

宦軍向純友城釜嶋

純友乘取中國諸城

追捕使西國下向忠平公辭攝政

大内康俊以謀圃田落城

前太平記圖會巻之貳

經基上洛禁中行交怠慢

太傳褒公十七年ゑ藏堅雄ゑ陸奥ゑ下向ゑ東國の騒動風聞すゝ
ゝ公ども交流い未曾ゑいらゑることやらんと不審ゑきゑゑ武藏守經基王ゑ
芝ゑ三年十二月廿七日の晩景ゑ旅ゑ上京ゑ出ゑ京ゑ歩ゑ手内ゑ引ゑ按察忠平公
ゑ渡し東國軍の次第委細奏聞ゑ經ゑ京ゑ又ゑ國の名馬ゑ多く頒ゑ給ゑ
打ゑ中ゑ名ゑ所ゑ行ゑ傷ゑ按察ゑ純友ゑ殘黨ゑ殺ゑ給ゑ事ゑ城廓ゑ
構ゑの所ゑ攻ゑ國惟幹ゑ殺ゑ給ゑ所ゑ千ゑ人ゑ勢ゑ合ゑ二ゑ條ゑ殺ゑて彼城ゑ
攻ゑ落ゑ賊徒ゑの外ゑ勢ゑ留ゑ置ゑて夜ゑ生捕ゑ早ゑ速ゑ純友勢ゑ近國ゑ振
ひ攻ゑ傷ゑ給ゑ中ゑ也ゑ伊豆ゑ海ゑ岐伊ゑ緣ゑ佐安藝ゑ周防ゑ彼ゑ屬ゑ
急ぎ御勢ゑ下ゑ遣ゑ大ゑ及ゑ騒ゑ出ゑ來ゑ國ゑ名ゑ延ゑ
給ゑの後ゑ殺ゑ逆ゑ御強勅斜ゑ引ゑ洛中ゑ入ゑ按ゑ強ゑ

ゑ殺ゑ引ゑ入ゑ東國ゑ内裏ゑ東國の朝敵ゑ海の賊徒東西一度ゑ
起ゑ日ゑ急ゑ告ゑ交流ゑ
いゑ年ゑ天慶ゑ三年ゑ月ゑ今ゑ六十一代の聖主一度も急ゑ朝廷
の交ゑ絶ゑ引ゑ絶ゑ
樣腹赤奏國栖奏白馬節會踏歌節會
音も吹ゑ絶ゑ詳樂も奏ゑ政殿ゑ始ゑて諸卿一同ゑ殿上ゑ集ゑ
日ゑ唯逆臣追討評議の外ゑ他ゑ
貞盛賜唐皮小袴下東國
斬ゑ前常陸ゑ掾平國香の長男上ゑ
其仇ゑ報ゑ
月十三日舍弟繁盛の方ゑ使ゑ送ゑ

上平ろ更盛
屋敷くらべ
淀小舟の
そ力將門逐討
のゝあ禁忌歴
より

殺しの所み拵記未方以外無勢の間大敵浸こ成えびしく絶み味方手負
剣文上戦場に於く夫にあらず城中に籠りて専ら保養法を以て
又とも醫術験みくしく逝去し給ひ畢ぬ我々兄弟ともに生国しく儀に
及ぶ支給いひ甲斐なく存る間死を同じくせんとの人々も文の遺誡も又肯ず雖
くたびくく山林み身を隠しけのるくんと結ひくまを御下向有く孫繁の計を廻
さまひくうとて書ふりる臭盛も今まぐたのやと敵と謀く対の変化成
見んくく偽て討死しかを法し給に変もやと責ていたひ厭こ給ひしに其又成
見んくいく肝消公遂ひ急ぎ拵政患平之の御館み来りく泣く御暇をそ乞
まを死殿下宣ひ々るいや所望とのひるく汝一人行向ひとりしも敵強大の上
い都く不慮の義もあるべきを召度使の下向も近き強るまに其時官軍来
先鋒しく赤意を遂しるべしと再こ止給ひ名れも中こ忍るまでく見へ
られば奏聞と給ふみ其志の深切なる変を感じ光仁く即勅許ふり御手

変と遂急ぎ仰ふよるべしく唐華しく唐みの小為とく御剣と添て賜と
則拵改宣ひるへ拵ひ唐華小為とく御剣と賜と
みふりて天下兼平國家安寧のあにとく紫宸殿の皇后に遂とうなへ
脂茲男の不動明王の尊像を安置しなり祈の師み天皇の御叔父尊
とりて真言の奥義を極め己修三密の棟梁しふり則勅命み従ひく奉るに
向ひ秘所を結び伴の法を修せしる脱み結願七日の未刻ばりに紫雲満
空ひり雲中しふり荒らかみ壇上み落るものあり月卿雲客寺異のこと成
し給ふ暫ありて雲消壇晴くまを見へ一あの獲あり櫨白に白く美なる
赤蝶公裾金物み付てを糸縅みゆ中ばしく華成るり裏を返しくくるに
實の間を見虎の毛あり後中も虎の皮ゆく威しくしとぞ云へ實も易
事のあるべく後天皇不審みを召其吉凶と為ひとまれ考文国勅答ゆ
こを拵ひるへ拵不動明王とまるへ拵みへ無慮法然の相と現ぜしへども

内心は慈悲哀愍の仏状具足せりされバ火焔を身に現じて如我の相を除ハ
大日胎蔵の身を現じて大歳の腹体と頭判の謂あり此頭胄に如じ即不動
に七の猛あり其ハ頭其ハ臂其ハ足其ハ背其ハ指其ハ面これ皆天圓又莚相に相
對して人の五体を圍みて悉あり猿王ハ胸中の守甲冑に如じ胎中此
猛ハ七あの中の其ハ面あり王ハ此猛を真言秘教の中より出て不動明王
の化現し猿ハ戒許之我朝の当住る是に協へきとぞ宣ひたる則是を磨迭と
ぞ名付らる此猛出現して七日に桐當我日王上南殿にましましけて東天を御
拝ありけるに八天の霊鳥飛来り大床に侍り主上御感と弥く指る我ハ
体の異鳥勅命は門く踊上り御業の御縁に此事をさとく奏し申さく我を
王とる神宮より御剱の使者に来ましけとく羽翮しく飛きりぬる其ハ小の
太刀を落し留ありし上御自此剱をかきまして八天の大異鳥の中より如る
れまし へとて小烏と名付られしの唐皮と共に執しられたるされバ太刀も猛ま

同じく佛神の御製作にて本朝守護の兵具へ六代まで内に傳へ其後武道
に遷し将軍に賜ふべきは天皇の御記に留置給へりまた今貞盛
追討の首途なれバとて代々の重器なれども是ハ特に下賜まり貞盛拝領
して平将門の天下の敵なる速に誅戮して退治の功を建べし
勇く東国にこそくだりけれ

諸社諸寺御祈祷者度使下向

天慶三年正月朝敵追討の御祈として公卿の勅使を伊勢大神宮へたてまつらせ
次に宥殺の叡上の口にかめして兵革平和あれバ行幸有べきとの
給ふ其外三千七百余座の大小の神祇悉く御祈願となりたまふ又もなく宮
階を降りたまふの諸寺諸山の貴僧高僧勅願所にわかれ道場
すこしも懈怠なく修せられける中にも延暦寺の貫主法性坊大僧
都尊意ハ鐵に鑄の四天王を鋳させて比叡山の大講堂に安置し将軍を

前二ノ六

撰く加授せ給ふる實に文年習学修練の功さてゝ弘仁天平の白羽の箭
の流れを汲み東のゝくに〻まで東征こゝに発り名を呑まの法義
貴所授りに於て大威徳の法を修せる和尚の弟子と授ゝく一切の魔を摧伏し給ふ修験者法海湯殿の高僧まく
弘密重重の奥義を授り堂上に向て懇丹を礙し加授せ給ふる和尚の姿
う巍巍と常し弘法に若しゝ如来同絶し 炉壇の猛火空の中に直信に燃て猛烈
分世八宗のあらゆる伴僧の因もゝ人こゝろ奉舞い勅と文人元明の法を
絶し給ふ夏物の威験新に〻く弟の毛もよだつこゝろの毛孔も逆賊伏せ
為に〻く法の名宿に勅して百人講を修〻く仁王会を行ふ
山時も法義貴和給賢の講師に其日に於て平賊祈願の為に貴人
て給足ふ武勇まゝく甚怪奇しかも法義未絶と賢さく奏しかし今
よう本とる者の今伴のねりよくいかゝ其前ゝこゝろ文に強元給い

ざりしが言に〻しも遠ざり高験の徒こゝに有雖ども法に〻卿命謙和ゝく
退付役と定る征東大将軍に奉謙右衛督兼武蔵守副将軍に同合力
刑部大輔忠舒 散位武蔵守源経基こゝ同元し何も馬杓具爽に出立て軍兵
と石具し奉内でゝうう上南殿に出陣成り近衛司は諸下に陣と張内外に
の乙卿八座八省の諸臣奉引しゝく中議の名會と行ふ大将軍副将軍名礼
紙正しく振舞て給刀美に鈴を賜ふ弓場殿の南の小戸より出立こゝに中
中数ぞ人〻ゝるすかゝち東に東海あ左に官府とゝゝ軍功わゝ恩賞
でゝ礼ぞ礼に宣下でゝ礼其禄に日

大政官下　東海東山道諸國司

應抜有殊功輩加不次賞事

右今将門狡悪弥長宿暴暗成猥拓烏合之群已小狼戾之支究國宰而奪官鎧領之
邑而支枝掠輕狡之黨愚意之族或欲二朝之辱自社勸誘之属或擬延行時之命

与人功畧之中將門不顧微勿還忘朝憲遂恣叛逆之意更夾窺窬之謀縱有幕甲之
千萬何犯畫象之紀縱有驍勇之數百何敵千弓之城獨知井底之虫空忘海外之
角鬥以來本朝之城叛逆之基未有此比適懷暴心之志空遇誅滅之殃皇天自可施
天誅神明何有秘神兵抑一天下寧非王土九州之内誰非王民官軍黠虜之間豈無
憂國之士乎田夫野叟之中豈無忘身之民乎者左大臣宣奉勅宜仰國宰若殺魁帥
者募以朱紫之品賜以田地之賞永及子孫傳之不朽又斬次將者隨其勲功賜官爵
者諸國兼知依宣行之普告遐邇令知此由符到奉行

天慶三年二月朔日

貞盛従五位下左大史尾張宿禰言鑑

右中辨正五位下兼行内藏頭源朝臣相職

又西國に左衛門佐藤原純友叛逆の謀を企て海賊の船千人百餘艘を相率ひて
海内の勢に乗じ海賊の紀伊守藤原
海賊の船千人百餘艘を相率ひて海内の勢に乗じ海賊の紀伊守藤原
海賊の船千人百餘艘を相率ひて海内の勢に乗じ海賊の紀伊守藤原

討て出雲の守藤原維幾朝臣の所管なりし以来年久しく絶てありしを今度伊予の貴賤
街に充ち見物に其出立よりは紺地の錦に赤地の錦を以て端袖付る猩々緋に赤糸縅
の鎧に彩虎の振金物を金銀にて打せて彩頸の甲に猪の目透の歓形打たる武
猪頸に着く金作の太刀に豹の皮の尻鞘に赤銅作りの打刀十文字に挿て流鏑
に銀の切くゝりたる丸木の弓の真中掴り三十六所に成る深羽の征矢に桑毛なる馬の左
く逆しに乗て地に狼煙輪の鞍を置て厚恩の歓を尽て千騎と踏せて出
立て相従へ大くに成る系図を以て国轉に監物平清基純理進成茂教信源教国
清原流義伊賀介定純伊勢前司惟盛清田安房権守伊豆入道周防前司貞盛
天慶目高貞信波前司去塗其外諸國の大名三十餘人郡合其勢に萬六千餘騎
二月二日に都を立て関の東に向て逆々の乱を企すべし所々の眺を いまざん別め
山の走湖うまざりし法の音さとりぐゝ方々中に成て山の嶋の法も長雨に
ふるさとり嘉に曇る鏡山まの氣とも移もしん勢田の橋打渡りうもに成て

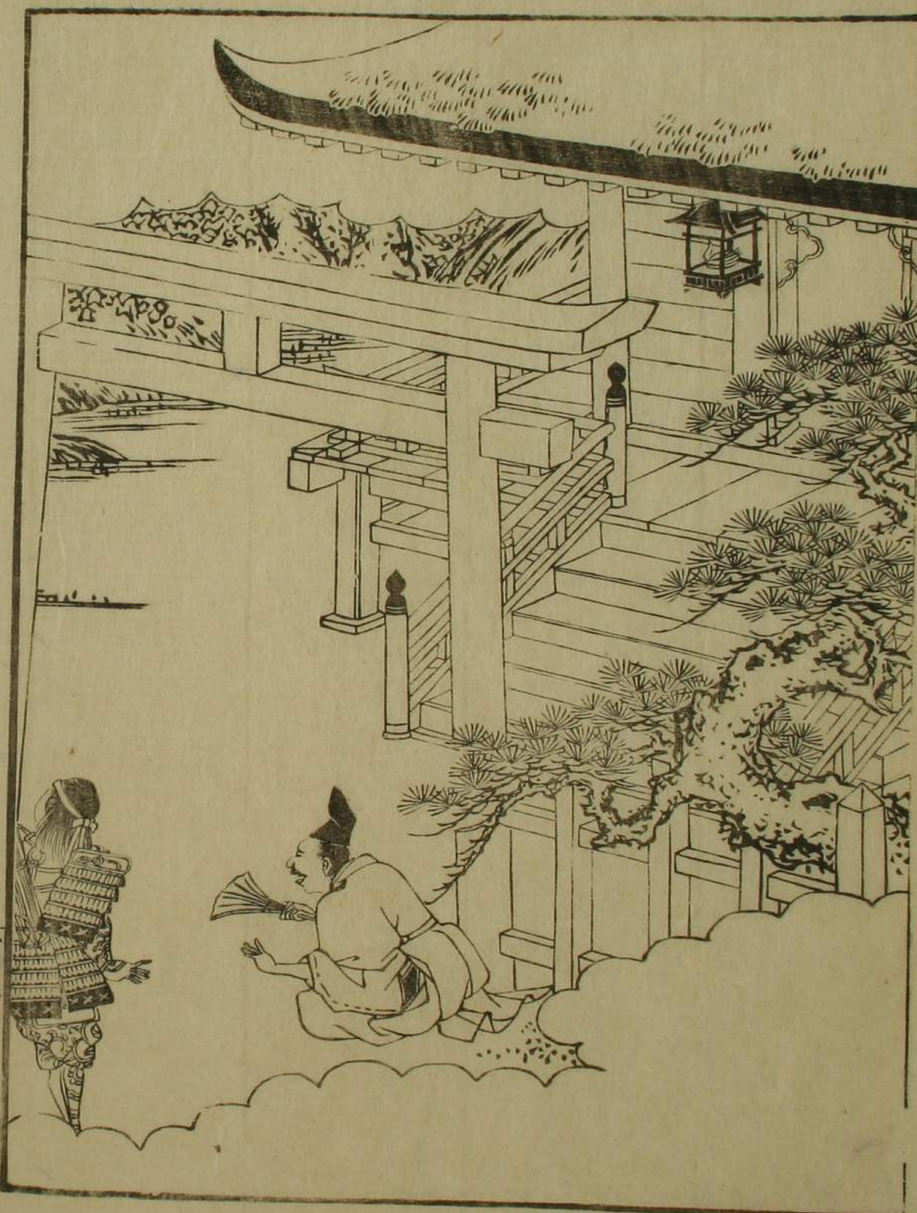
將門退討伐
して義平忠
文忠舒經基
東國下向し
都三條橋ゟ

三上山むかふ孝霊天皇の御宇に富士の高根とりつゝもよ一夜に浦出でしとや旅人
夜よりうつくしの花る森の下まも霧出よりて若葉搞乱知川越く仲来の手賀の宮
居成仏教三小世宿より手綱くまる馬醒井柏原不破の関屋の荒残るまゞこの橋と
洩る雨よりさてもも行く濃国伊吹川の川隈も瀬くの清育静く尾張の地よも入
なごやすゞ如月のさのすゝ高し返りうる中夫もこゝ熱田の御社りけまくも日本
武尊よ草薙の寶劔といふ人ものるあり月代重ひつ行ぐに故郷をて鳴海
浮すゞ浦と今宴よ老の思ひよりゆとびのを原の中将のるゞく来ぬるとゝ泳
じんぐ亀よ生れ杜若ぞ思ひかゝりてうまこゝ勅よ名歌を拾くらん兵の猛
さ乙の夫結川寄かゝ俗ゞ鷲坂や若代来の若川より紀来うゞ絲と赤坂や二川の
駅まく行いまいく原ろよ吉江湊名の橋の橋杭杭でゐ名のこ武士の其名も今くるる
師よ感通ゆゝん天竜の川とやすゝく手浜ろ小松の中よ中ゝよ絲の高よ幾年の
齢と知ゝ菊水も同じ名よゆゝ菊川の流を汲く寄ゝ徳田義枝岡祝ん宇都の

よいきのうつくよも美よも人よゆいゆゆる書の細乃分逝くゝ越の糸を尽ゝ紀乃ゝ
寄の夜織ろゝ孔志乃機山よ吉の言入相ゝ紀久乃乱也日数積りて二月十五日
駿河国富士の裾野よ着ゝ行くゝ遠ゆゝ諸国の勢を偵ゝ迷
浮島ゞ原と前よ面ゝ清見ゞ関よ陣をゝ諸軍の英機をゝ引ゝ人の抑ゝ
分野海乃一の段糸ゝ右を海水廣ゝ浦人雲浪眸を引裂たを山勢連ゝ聳へ松
風耳よ冷じく釣する海士の絶沢よ消ざる浦人を蒼天の星の光閑秋の蛍の秋
ゝも跳ゆまゝ引ゝ人ゝ乱れ軍監清原浜ゝ
漢舟火新冷焼波　驛路鈴聲後ゝ
と七言二句を綴りしゝ人ゝ優よ人ゝ人ゝ真を偲ゝ
貞盛下着武蔵国同意秀郷
去程よ上平左貞盛ゝ三ゝ度使よ三ゝ正月十六日那ゝ三秋ゝ日よ繼ぐ急
ぎゝ乃ゝ月廿日武蔵国よ下着ゝ合戦繁盛日系但ゝ甲斐国よ

牙と潜りとある禅院に参びく坐せしが貞盛下向のよしをきゝあるべきかの旅館に
弛り対面あるべく間東西数百里を遠く安否さゝに新まざりしに
安化公もうりしよりくに所にくに新まくに年舎しにもうまるに紀伸をうくくにまるとうに紐
額を合せ恢びの後神武潰せり合弟多に父の家後の分野多に遺言の法弟又将
門が軍の扶具にかゝりやさるまじ貞盛に父の先途をうんざり悔又代るべ
き多ひくうまじくにるお流に稽教別と接しくうして将門を責べしとて
多あるべくにくるべも其勢僅又十騎にだに足らざりしかれいぐいせんとちひろ
ら所に国香の諸従家人多まるかしとあ是びく居りしが貞盛下向と
伸べきもしくしとも集りるるべに付のるに八百騎にぞ成りぬるべ歩
ゝとて貞盛馬をとゞめ給ふるうまの方をうんをとまじ扶ふ蒼る端離の法に御
燈幽にうんとよろいいるる社ぞとるまじ国の一社宮氷川大明神と言へり戦場
に出べく貞盛に繁盛国弱ひしと解消あるべしと宣ひしと繁盛国弱ひしまじくいに父の喪る居

て国様のべかりあいべるべきとゝまりて今度の義向ひくに父のるに
志を抜ゝ文のるに共を先とし給御所にるまじ伺ひるしかるべきと人々ゝ
ぞに兄弟の人に則馬より下り甲を脱ぐ寶殿に跪き拜礼し兄弟三人合
上に元の法一命づ鄙ゝ宝殿に納る貢紙地に付約束を追治る擁護の時紙妙
し給へと祈念紙おしおゝるかる所に不思議や社壇鳴動し白鳥一羽とび
出く旗の上に翩翩しくまじる良をまゝく花切るまて国社明神の現
給ひく復ら世給ふ瑞現ありしして弦年勇ま恢ひる貞盛肩紙聳めるまひ
ゝるに敬国をまゝより異に南まり独るまひる良のゝに花をしを合ゐいるべ
洋ゐしとく怪給ひる紙国社の神職兵紀ゆ埔正範まり出くゆゝるゆ抑国社
とゆいに人皇十二代景行天皇第二の皇子日本武尊の擁化ありひる十六葉の
御時紀系の熊襲謀叛しるひに人将門上京師とふものを汁を仰くとし同
帝四十年の夏東夷多くに化に叛さ関東騒ふしに又ひるに大将軍とし多



前二ハ十二

さて後の國富士の麓迄よりこれを焼殺さんとて壮に
出でとりけるまでそれ天叢雲剣と接く草と雑物とを刈草と共に分く夫のうへに覆ひ
さまでぞ思ひ燃くの人を焼くて其人故の方へ向ひ焼く悉く焼殺さま
御分まあるしかりそれ更に世落の語に向ひ焼くるかたへ時ようやくや
又天叢雲剣と草雑剣と名付ける経緯の経慶野とかいふ所なく発端御年
三十二ばかりなるさて焼ひるすかたち尾張の熱田大明神と出来まうかたに所に
勧請し氷川明神と接ひきるさまこの南社の先駆に准へ朝敵と御追治あるべきこと
踵をめぐらしたるこの統中御昇向きの故國の方へ向ひ焼くるしかるとさく
気後ふ南くの御発ものこの小勢よりこの一先下野國に義向あるべく御勢とはけ
らるこのべしこの御系現さるる特に所おくれと佳例とかく武運の神あるべけるる
よ所やさまとなるこの只今の人さう法軍勢とあるまでかるく敵長の矢と合
しのもしくこそ思ひなるかるる所にて此國の住人義示秀郷使者公さくや

さまとなるこの南時将門逆意頗八州に振ひのるこのべしく其雑とのまてあるに彼に
逆徒の色所ゆたくこのべしも夫御方向を結ぶ諸賊とこの人ひさんと存じ内々使宣の
兵所招きこの唯今の御旅館を要渡西の敵いへいよく東國に御陣を移さま
く後ろべくいん中相共に敵追伐の計をあんじたるこのてひと移んごろこのでやをく
らるこの貞盛公のこの計つかまつりて誘ふべく計ごき謀りあと
憐くこのひとべく御芳を流に抗ひ形く系者伝ごきこのくいしくく使者とかく
さまとなるこの其後舎弟公迫付山文いるべしこの貞盛と同ごまこの経盛
まべくこの案くこのやさまとなるこの御不審の論のきこのひとべくもこのあるべち人のの武
御うこびあるべきこのくもひたべく日頃秀郷の行跡さんるこの其公也よくく武伐
仏の奥らまこのべまこの子くこの不武の朝を顧ぶるこのくもかくいさまこの悪も人
このるる文このくこのべのこのるこのかべくこの特に先このく南社の本現又只今の秀郷
の使者幽蓋九相奏さこのとく秀郷のやさるこの有このまこの合体このて朝敵

謀叛の御計畧をめぐらすべしとて佐竹義重も兵を岡
ごく郡に下野国より出張せられ佐竹義宣秀郷同心へ〳〵く相馬を責られ
ぶく〳〵と雲くまなく出国をやり及び常陸奥州武蔵相模甲斐信濃越後
上野の者まぐも空治へ〳〵千騎三千騎又百騎二百騎ばかりもくと馳集り
しかるに正月廿八日の晨到に郡合又萬三千騎下野の国中なかの下岩の
浜まぐも軍勢のやぐ〳〵以前もあるべし
宇都宮合戦将門敗北
其頃将門は帝都より責よるべしとて諸軍勢を相編く既に其用意をなす
捕鋒とも憑うし義宗秀郷故よりなく藩離の中より大軍を靡し義宗
よりとゆめ〳〵おもはざること限ふ一方の義を固く貞盛秀郷と
延治の軍誠ぞうし正月廿九日軍評定しく翌日来明日相馬の郡と三ケ
下野より義宗は其一方より御厨三郎将頼を大将〳〵て安房上総の国の兵四

萬八千騎と相添る又一方より大葦原四郎将頼平と大将ゆく九郎下総の
勢二萬騎ゆく〳〵おるるを以て二月朔日下野国壬生宇都宮に打
陣を進る敵の陣をうん沒せば其勢壬生宇都宮に打
初〳〵は東西二三里ばかりのでくゆく義宗方騎ばかり教と
ゆんあくすこしばかり所の貞盛秀郷とをの陣と云く蘇波と揚させ
てこや夫合の鏑とぞ射ようる其日は互に矢軍の日なるべしく墓ちの軍
もあるべうるまで二日のまで東西ばかり軍をぐまりて大百騎三百騎兵
法くお殘くの陣の射遠てる矢合をの又月の初より法く誠平のお合ふ鏑
の光と秋の秋の電ようも驚く煙おそ天に揺り汗血地に滴どうあり今初
教ぶ義宗の軍よりおなの人馬ともに疲まくこぐ〳〵く臭に絶居る所に秀郷
の本陣より武者一騎急出でうるとひてく名まるるその名人教ゆ〳〵絵に
名をふやとも加人ゆるまで老い法具の行人法門手に貞盛平は内く

はつ川夏色
東條左金
とうかい
なぐひよ
うちぐて
記名

五十七若年のむかしより数生死好んで山野に伏し草を敷て枕とし
て和漢に後世の罪滅を願ひ給へども
所詮幸に孔雀王の友軍の教を加へ給ふ御恵の為に
生死後の面目あり給へ」と申上て軍神を祈り給へと高聲に唱
へ給へ公方様の大名方甲の高名方
所に持参の勢の中より黒糸の縅着て栗毛なる馬に乗る武者
馬を歩せ津川に向て名乗る
と者あり齢十七に十五歳と
二人とも討死せうずるとは我が甲賀の命生涯に若武者恩を
深老眼に成て其後成その軍に討死せんと思へども若武者あり
あるべき敵とそひきるべ人数おのおのと
今日中にてはいざや立て老後の楽に立方歩に若武者のよ本まさ

に山陰に向方馬と乗合て川時移るまで戦ひ
えぬ東條もほ川もともに和則
中々の御名もも共に討死と極めて上にさのとよ
と及びたとへ物とと云べく老命已に
さ遠くもとるるんとくば津川も細やかぶし同じくとぶ
て和具投きく立て突遠てく馬
陣ろうろる緋威の縅着くいろ
十猪馬の鼻とふべく外山の嵐誘ひ
出ろう真盛の方ようも同じ
引そぐ向敵の馬の法藤薙んと
そのぐもと下知しくとば其よの兵三千
ようもおそろと切て出東ろ退廃け

右は近けゞ左馬頭義朝の子九郎義経と息とも結び責強ひ一矢よ射てそ事ひろされども唯
雄へすゞ攻ゞ今日も又戦ひ暮しくるゝ程ゞ海の兵ども明日は是死の場
負を攻ゞ合戦ゝ事共結句武勇しく時を待ち其歌の世の中斗
より面白おびゝしく日ともひとたゞぬ有ごとく見ゝ三日の夜天も海も
使を立て暗くくて兵をすめゞくく相紛しく其日いとゞ多しく歌
よ入くも猶小共くゝ多くまゞ迷軍こゝる惟幕と立て曙ゝ暮ゝ焼きて
ゝ舟大東風ふく風ゝ吹敷くれ平ら波不の軍ゝ燃付ゝ波陣こゝ立て
騒ぐ敵討入ゝ小ゝ武士ゝ戦ゝ馬ゝ乗ゝ引ゝ組ゝ者ゝ唯同士
討ゝ敵ゝ小ゝ見ゝ貞盛ゝ秀郷ゝ武人ゝ海ゝ多ゝ者出来ゝ
ゝ緑波ゝ合せゝ太鼓ゝ鳴ゝ楯ゝ盾ゝ敵ゝ射ゝ
く度ゝ十方ゝ暮ゝ一晩日の敵ゝ海ゝ落ゝ者ゝ
乃ゝ源国ゝ馬泥ゝ武ゝ拭ゝ晴ゝ行ゝ見ゝ誰ゝ

ふゝ武ゝ国ゝ耳ゝ庵ゝ残ゝ
ゝ敵ゝ陣中ゝ居ゝ
ゝ

御厨三郎将頼討死

備も貞盛ゝ下総ゝ攻入ゝ
敵不意ゝ敗ゝ
ゝ分ゝ落行ゝ
ゝ味方圍ゝ
方ゝ取ゝ一人ゝ
分ゝ秀郷ゝ
武義国ゝ
ゝ
利根川ゝ下板波ゝ

利根八の
かくりさく
御厨三郎
ね頼
射たし

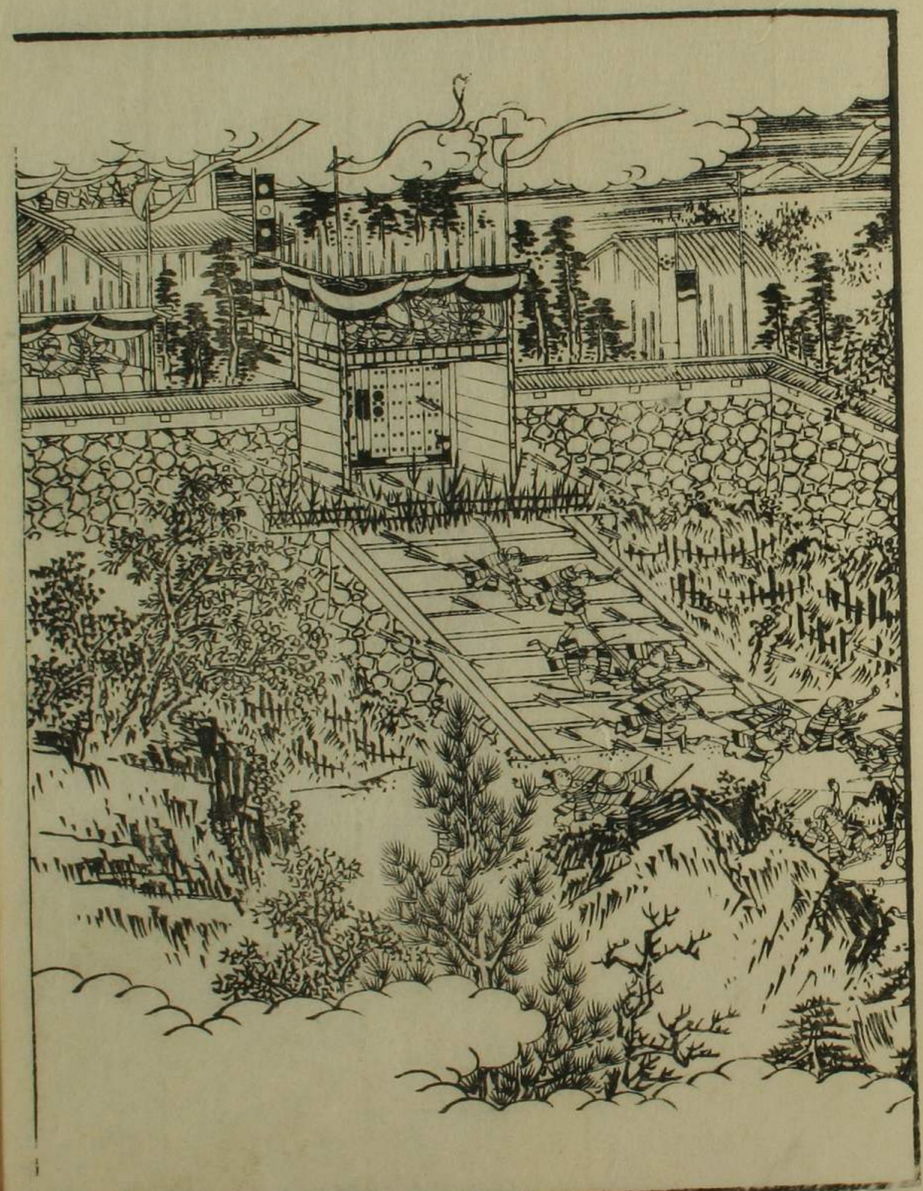
中々歩まで渡りあへず川向ひとうたうこせべ
旗一流おしまろ其勢二三百騎ばかり扣へうり進るらんと旗の紋をうたんとべ御厨子
将頼ゆり立て弓嬉しさ泣るく扇をひらめかせ高名を賀よとやるいはこいわ法師云
云やすくひが馬よりうまに乗川を渡はるべい御馬一足拝借仕りしとやうまに
まに成さるべうまに一くしらひうまに
ふりしらども究竟の逸物よくしに方の岸よぞ着こうりける云云するいちはこよ
ふやすくしと大河を越しる頼が陣よぞ入へるる者も落来る勢を待法とうく川
端よ陣をとれおうるく一日逗留しうりまに又敵軍の兵いちかしこうり駝集う
其勢千弐百騎よぬまろう今入かうよとろ所へ田原を帯に浪帯川の東岸
よ打除こ緑波を後やひくしく射よと待くうんぐよ射こうりる頼ろ兵ども
一牧楯をえい百挺あの川岸よ突並てぞ張こう田原千騎ばかりとうく吃とる
紫しに敵軍勢よ向くやうまとるる敵射ちしまうまとく矢の一川も射返ぶれい

伊こぬこうよ敗軍の士卒どもうまびに矢種こうる射をしこうりとそうるぞてこに行頼
神の醒ぬ奴ぬ伊のそどの支うあるべさぞ渡せものどもとて都こく川の上下とう
ここ行かよ三町斗川上よ川幅をおしう度くうんくうまども流を辞こしく
ちうも清げよ見てくるよ馬とうけ入弱へ口千騎の兵ども一度こ馬を
歩入こまべ水こあの岸よ溢きこて三ふの渕瀬へ中しく馬の腹ともるる奴ぬどうり
うまに八一騎も流まに伊のそこにぞ着こうりる頼ろ軍勢ども弓矢八悪く三
日の秋宮都宮よくうしひうまども大河を敵よ者こうまに敵左右ろくもくへい
こうり伊べこうひろに案よ頼遠しく透間もみくこうりこかうりうまに後平海
とかしこうりまうや敵こ陣ふぞ陣ろあしせそこうこ方こうり遅れ老修法
ここそ攻こうりうまに頼今ふうろへべしとうをこしく落こうしく味方いよく強よ
ふこう跡と墓こく追をこうりかくこうる頼を百四人十騎よ討ぬうる四三日七日の
午後よ氏義国川越まぐぞ落延こうりうまの野伏ども落人とうるこうも

討ぬ。其物具剥んと又六百人が外ど縋とそうく。結かけてうね頼馬を扣く
中るハいうにもしく扣奥まぐく打越へく勢と射お馬の浸落せんと思へども大
敵ろうろう退けうけうり北伐又行先とうるを退さぐくよ乃紙うるされば
我運命も今日の霧まりいぐ紀よく討死しく天下の人口伝ふさがんくく夏
十騎を一くよしく殺り扣くるまの中へ面もうこに切てかる欲公燃盛の死伏
どもし威り緊張と思ひ薛易しく一戦も及ばじ四方へ数と逃散うり壹さ
うげと廣言しくまぐくく島伝絶落うかうる而の田原治帝千晴其勢
二千騎ぐうりみく法螺と合く退をうる素く面しぐさしの大将うる射ぐ
いうに命ぐ情さとく紀へ帰まぐくう道ぐさ賦し返せと聞くるるうるる教
聞くうる田原千晴とやごさんうまいぐ賦ひと及大将と獨射さしく打れせんと
いう徒と多勢ぐ中へ破く入縋ぐ及扶ぐ及蹄と十文字ちうる妻よる追懲けつと
色ぬくく味方とうんまいぐ浸ぐ義を始しく八十余騎ぐ討まうるれ残る五

前二ノ二十

ままう二位国郡三ケ郡重ふと負ぬとのもあうろう今いそまぐくとあく田の
畷の信と物具伝奪く自害せんとしうしぐ千方うる面のうるぐく射うる
矢物頼ぐ九の傍獲う鬼源うぐさと射延まうる上ぐまぐ一言先
言ぐ矢尾う伝く弦くく千晴の帝ぐうる嘗く貴分九凱歌ぐんしぐ
上させく下神くそそ協らまくまと伽くくく大華原四帝れ年い字邪宮のひがし
陣ぐく若くうしぐ貴堅の勢う圍と帝ぐうる嘗く対まと其分も捕ぐう負ぐ
剣馬ぐまうるまと引くうくうし伝小輪田十帝踏止く迫射欲を追散し其後伝る
う歩まうく下絶へ伝うぬ迫うる言明のあ人常陸う歩射ぐ間場う紙しぐ紙のう
ひく分く兵粮の用ぐもぐうした教くうるとさし寒く運送貝在ふぐう
九れ分ぐ糧ぐく落行くるるぐく二人共う生捕まぐふち大れの伊和うう
ぐ人実拾う入まぐ二人ぐ貴伝別うそそ平くう徳とむさぐうそう肖く其分
のまそそそやふしく九



將門ノ宿屋山城
合戦真盛秀御敗北

古河合戦信長公落城

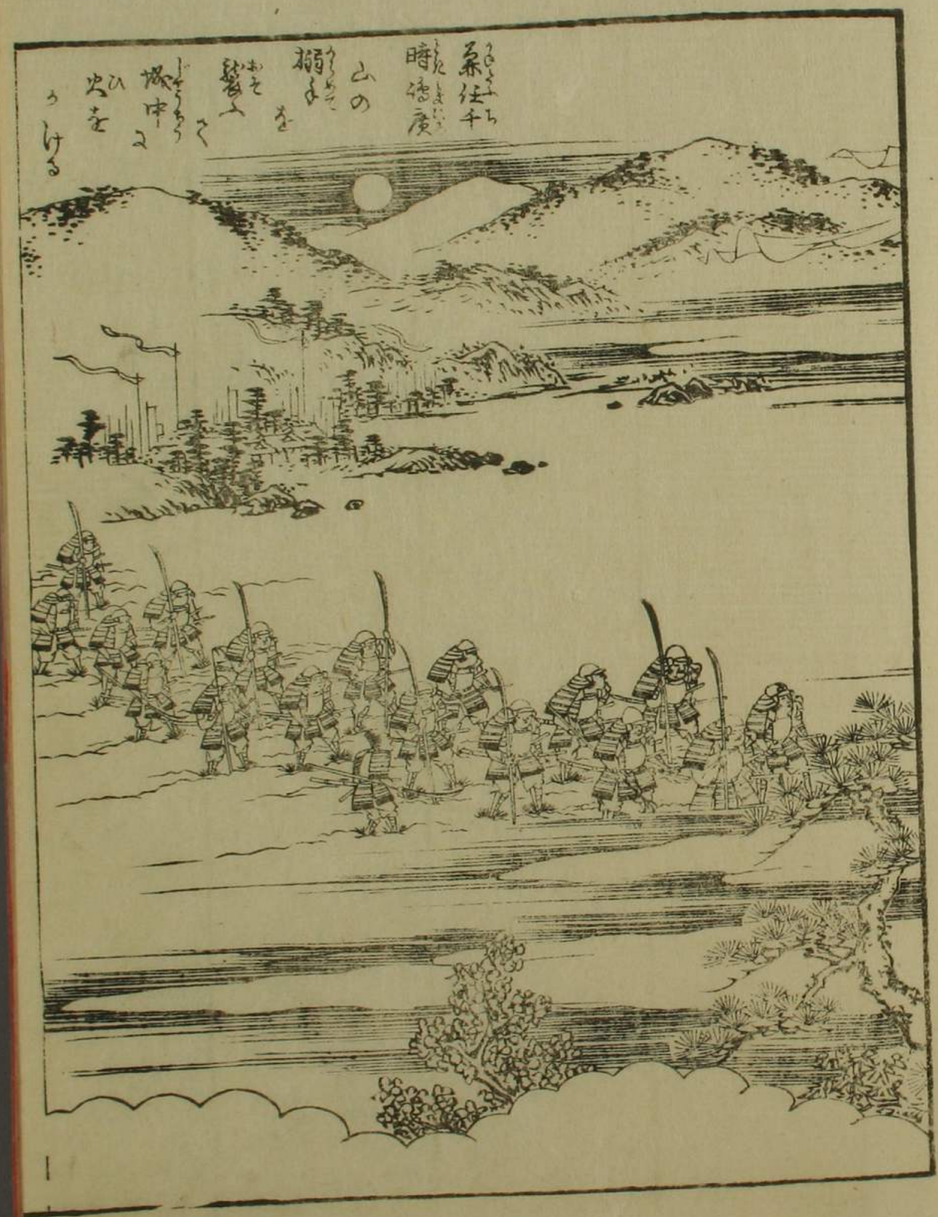
かくて彼門人下野国に対し紙をつまづも合戦の雄雄はげしく関ども伐とやらん
と甚だ右往左往と相結ぶ三月八日の明方より合戦大軍未だ和睦なき痛
手負て悩う軍の法者ども沢山なるぞと沢山なるぞと案じ相違ふ力とおもし驚
きく唯あきまとるぞうあり彼門はくぐ中を案じくに伐さ命ともに於ふ
ぐ敬と結ん事も武異の見くさ所ありとくに八番隊と二番隊とよりの真一
方より二番隊よく平治盤盛の案らるく荒木小川とちさせ真ん八万隊
猪と幻幸し古河より歩く出陣わまく坂くせ九株逆蔵木ゐを今や寄ると絵を
くうかくく貞盛秀郷巳方隊猪を逆くに九月ゐ宮紙ちく下絵と寄
ら彼くゐまび十日の彼まぐれより逆より敬陣をん家ぜび東和巳ゐ里ぐ間ま手間ん
ぐ色てくの猟三百隊流まに見より親くまうう家合紙の法寄ゐはげ真隊勢
のぐど丞い萬猪皆のみと歩くるぐ甲の星紙はく孫陸の油ゐ神紙ゐゐ嵐の

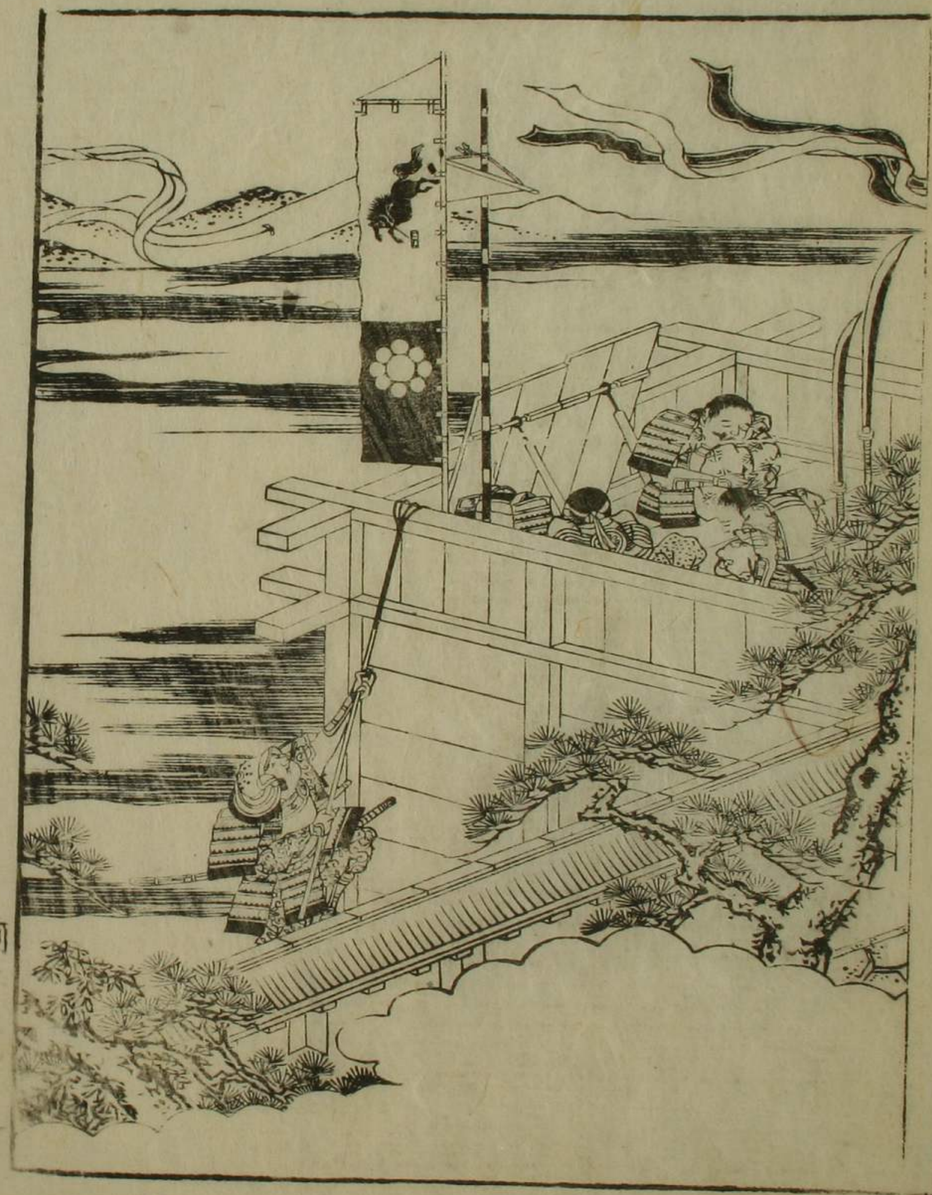
山のまその曝猪田川の秋の名まる綿紙曝ぐく有う兵刃さぐよおまろう敬
方の時の刻方二十里ぐ間ぐ合法うく樹木に接く地ゐ隊と山勢も碎く岩
ゐ傾るぐうく夜刑ゐう夫合せしく陸とあくせび攻戦く隊ぐ兵ぐ敗ちく
い高岡の証厚のこう法日の雑隊面くの寄ゐ迫まうと励く寄紙隊ぐ攻る兵
いたくひ千猪ぐ一猪ゐ成くもけ山攻ゐ紙敗ちぐ見も引くと命紙ゐ死ものゐ
くくぐ攻こう久るされぐ負紙いくたもの数千人とう数と知ぐ骸穢ぐ
山紙ふし血ちたくく法のぐく美国ゐ知ぐ家ゐ神代のゆくうゆく
孔先駆いまざさぐたくに目もくまに行きくくくるも中くおろうゆう一脇目
の早且ゐう今日の法知ぐ法ぐ敬意百八十餘度の戦ゐ人る共ゐ易まくまぐ
一敬るの見を体ゆ目傷負ゐ法ぐくく双方陣を引ぐく捆ゐる事天十餘
町五ゐを無を焼く明日紙ま河かれ訴ゐ荒木一向ぐ勢ぐも繁盛ゐ近ゐ
らまゐ見くも九十二日の申刻ぐうゐ捆馬の陣ぐ引るゐ国くゐれば将門

やうにやく数の城を囲まふべきと退自在成るまでとく雑人二百騎人どのを
しとどめく青のごく無火焼せ其秋の中る志げくと陣所引き移度山を
引給て切所〳〵を接楯櫓櫓無数人石大木横たをたくさの人荒木を引き巳
軍勢七千騎ばかりを荒く二千騎とをとく修所の業にかくしたる城
中嗚呼武者どもやく待けうり明まで十三日を盛秀の支勢蕉の末とすく
ちるの呂とややく敵の陣を押しよせてれども青を落る敵ふまとび人を人
もふうろうろうもちを人をたくらうく車のゆうと向へ出敵の刻ごろに
山陣を引く移度山をそ給ると聞えれば三ば敵の要害紙せぬ先を
所時もいそげと丘に成ぬ国衆を帝千時平三業紀を二萬騎とれ添く
碓氷より寄せ貞盛秀郷四郎修弾とく標をめうでて寄る日
日本の上列移度山をおしよせ鯨波三度あげ矢合の鳴矢射させれども敵
へぐそひん間も合ざ南の矢も射ざ城中志河より返河とくもすく

前二

陣をそんぐる武者上平の弓雄の武者ども八百騎人どのくるとうろ敵
歩を引く逆寄引の分接楯一を押し破く櫓の下まで攻寄う城中より
そ〻国を敵を近付相図の鼓打を名れば敵の出し屏ようを名れ山十引をけく
投たうる寄まる楯の板を微塵る屏をかし陣を人所を十方のる櫓う
面の陣ごく鏃を待く射こうるる間志先んぐる八百騎人敵くを射を
まこく引退く元来松〻多年を振くる城ふまとび本戸を二を横人三百騎所を櫓
と揚出るを廣さ陣を三丈修うを城をく世切岸を屏風と立を敵ごくるる
を八九すぐうの混沌邑の甲を鴻貫をまくかる屏とぬて軍勢山を修弾を
敵ごうを名とび我勇弾の人勢をく修の百日攻まども輙く寄ることを有難
と我ども是こうるをこれども寄くを多年修代の弟浅一言芳是の軍勢共
ふまとびおども射ども三度武を成せば人〻息をも絶ば攻こうを陣日院を若人
を及ども出攻武を退ば命ぬ敵ひを陣ば行程十里を縁る所を楯


義仕千
時徳庚
山の
猶よ
を
繋く
城中へ
火を
うける



る様ぐあいよせ近より攻戦ひろるる流石の軍勢其の身強石なもあるべきれば人る
ちろ又つぎ為まちたびくく皇と続せんとくるの鞍下し浅の上岩くく
行ひげ拾くくく休居こうを為さいた拾門がさのくようまへしたうう軍勢ども
も寄くぬ法より間を呼ぐぞよてうを為戦人為まてる兵どもそんや敵対よし周章
強ぐ所を城中より逆兵二千餘人こうの本戸により同時こぞへとかけ出こうり
其敵いいはぐ敵まびうるりーぐ月さ人強ふく軍さの振るるあるぐ為さ敵陣
中うえ滿くくさいた時をとくくかしこう切くく廻つを為間さくた在所もさんけ
ぎるこびあるよいよく度とうあひるふ同士対をぞきうを敵大将秀郷幕く仏
ぬやなうはくん遊兵一千餘騎かーこの林中よりあくなを出味方のお河を渡く、
戦こべ其上敵ハ対対する兵ハ一人もあうつるぞそま一紙同南ま対これと奮
あばくく下知ーぬふさしぐも代間敵ぞうを敵の軍ま氣為まを統率まりく精力とも
うをたるう敵対のたれ指宇真世利兵堅を敗るるるぐもま秀之謀公ちぐ

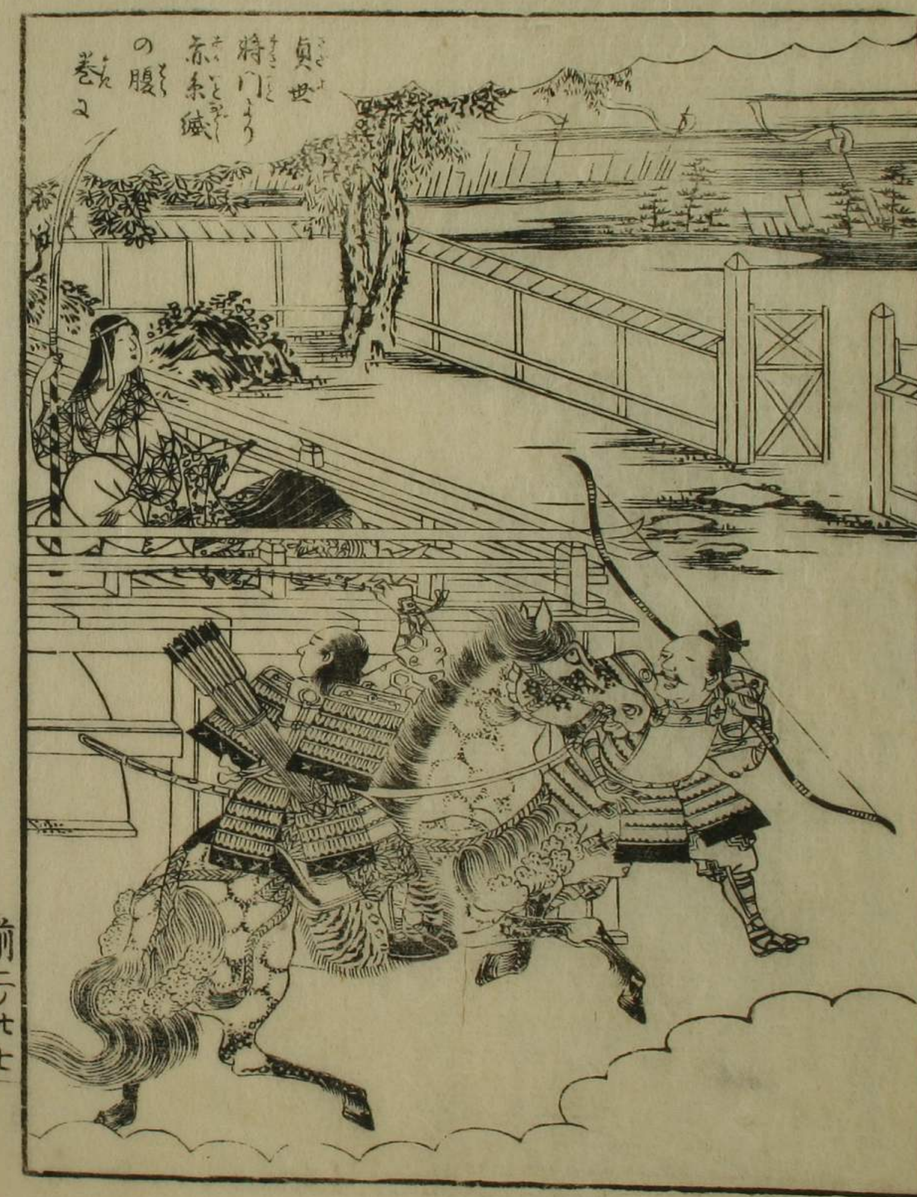
前二ノ廿五

くく南山切くく四て敵伏殺こ敵和こ彼れ
べ海岸の兵伏ぎうひくく八方ちちく落行ち為ハ時敵遠るかく退りけこ
為ーこべあ大将をそどあ宗院の人くこ一人も残ぐ彼こべう対きでも天
運ちやさまでをくハ退ぎうるる間美犯の命をたちうて天十修剛引退き
落残る勢一美猪ぐうあく陣をうくぞおーを為かくく搦ようあひー
兼仁千時伺とうをん相國の別沿相遠ーく十三日の合戦る弥を其敵のみ
別ふてく鴨慶山の南の禁ま為着ま為伝ま大ま為の合戦彼を法大将ま為小相
馬の為の岩ま対きるう国くを是べきるいち軍役ををく十四日の相國の別
沿るーびま軍の按牒ど合きまくを為訓ま為の兵時ま大ま為の軍勢敗小世
車ーをくくま戦ぐが油ぐをくたま達こーく相國相遠ーはまべこをを人為貴
とべをはんとを真ようこを為人奥州上発の勢の中ようを究竟の兵三百人十
猪ををーくを為ーく岩付右治ま要内をを十三敵の月為天ま為ぐく結的暁

を若る折そこよ東の堀より寄びのぐりうそる山塚の南の林へあの尾崎より
東の海をぐ大江有くをゆゆくでい越くをゆうもぶりうをふをと三百又十人ぬん
兵ぐるをのく走くり寄ぶ二東づくと結付く破沼ぬ山をあくぐり走ようう
よへ松柏枝を伐く神く眼をさう荊棘乃を塞ぐ呂と破る先ある兵木の
根よれ付へ後ゆる兵へ其ゆ人の鎧の呂櫓よりう付半時ぐうぐる発角幸
若くく坤の方櫓の下よぐ呂よる塚中よへひくく山乃ようう敵寄ぬ乃を
ちそひうくびくん後方の敵をぐ寄ぶ呂易くちひうりく
用心の体もふく警固の兵一人もあうりう吾法先櫓の狭間よ熊ひを
歩うみくさうくと結へ上りうく屏ようゆ乃ひうをぐ三百
又十騎の兵をあくゆ中よぐ入ぬをる山塚中の素内をんんくく陣くと廻り
月るをくをふ敵日の軍よ呂をくく寄級をくそ森入るかくて三百又十人
の兵ぬ又ぬをくく敵まうう体よんせ開くくと塚中をお回くゆ乃呂見

敵回りの和ぬをうく体ひへとんぬ軍より伝出ををいあいくぬをよへ体
体ぬうくむるをて体をゆ塚中の法もくまぐ張ふくんすあくく
敵も分のくくを呂をるをんとする法をあうををべ分へ法方の味方迎付ぬらを
くちくの櫓かくこの役ふりをへとかけくをへ折を東雲の東風ゆ吹
よくれへ体燃塚中ゆ元満くくや東ぬをうけくひうをぬの兵塚の案
内ぬを唯今ゆくんを呂ぬての陣屋をへとかけてへかくこう商をあげかくこを附
をよくくをくに切ゆ回りを体程ゆ勢のゆ体をもん定めをくを大勢の寸
へくるをくくをあをべ寝をべををうくくを兵ども逢方ゆをれゆ矢をもをを甲冑
をも折葉くゆ目光くを落ぬゆう宗流の兵ども呂ぬ青ようう一ふぬ集ぬを
居くゆ日の軍の評定くく居をうくべ商ををくく行振敵付の勢ども海
て大勢みくくいあ巳一騎ぐをうをくを安ようをんをのをくくを門
ををじめ一族従類二百体人ぬ乃長刀の殺をゆくべ防戦ひをををども兵ぬ

宿怪毛の馬公貫ひ
遂に対れ


貞世特門より赤糸縅の腹巻に

ときんみつくまを眼を塞々まどいとおもくくく東の尾ようを後ろ
しかれば方の勢より迎ひかべ和ともけるべるしに大なの勢ども青の軍に
ちんぐるよくいまざこ所より集ゝざりくれいべるあびより兵を図く唐ようり

辛酉合戦武義又弟貞世討記

ちろふより和門治廣ふを落く辛酉ふ張よ〜図〜々まいべるべ数の狂篇
弟の醍醐先より寄よくく貞盛秀郷二萬騎よくく十四日の己の刻ゝ辛酉
ゝべ図れる和門が兵ども今い世中係ゝやちひくまもくくとうを伐世甲
を従ゝ陸ゝ海ゝ出ゝるる先一番ゝ波上総の勢二千餘騎よく貞盛の
勢ゝ加ゝる下野の兵ゝ百餘騎今和ゝ行ゝ波ゝ後ゝ秀郷の勢ゝよひ
来ゝ其外千葉平福豊田香丸の一黨臼井佐倉の一族東條有係の共我
さたよゝ後手に来ゝ大和弥太郎ゝ成く総合七郎ゝ千餘騎ゝ寄ゝ来ゝ
囲ゝ鎌倉をゝよゝりゝる和門が軍勢ゝ蔵来ゝくい一番騎ゝも見ゝ

前二ノ十八

れども十月の三が尊ゝ勢ゝ湾し来ゝ寄ゝ来ゝ討ゝ死ゝ定て居
ゝりれば敵大勢ゝ来ゝ寄ゝ来ゝ後ゝ作ゝ来ゝ世ゝ間ゝ軍ゝ命ゝ後ゝ方の
攻ゝ合ゝる平刻ゝ天ゝ鳴ゝ日ゝ時ゝ軍ゝ寄ゝ来ゝ馬煙
東ゝ西ゝ靡ゝ鎌ゝ波ゝ地ゝを揺ゝ動ゝ小山ゝ平ゝ和ゝ武二千餘騎ゝ寄ゝ固ゝる
貞盛の兵ども大略今和ゝ行ゝ人ゝ数ゝ痛ゝ軍ゝ一面ゝ後
んとゝ先ゝ来ゝ寄ゝ来ゝ猪守真世が一子武義ゝ弟貞世ゝ今
年十九ゝ歳ゝ武ゝ義ゝ又真世ゝ今和ゝ行ゝ廣ゝ山ゝ後ゝ方の刻ゝ来ゝ寄ゝ来ゝ
やらん其ゝ行ゝ方ゝも知ゝ不ゝ知ゝ人ゝ和ゝ武ゝ
陣ゝ寄ゝ来ゝ寄ゝ来ゝ軍ゝ三ゝ方ゝ一ゝ度ゝ早ゝ鳴ゝ和ゝ武の運命も尽
ぬるこゝろ知ゝ人ゝ和ゝ行ゝ廣ゝ山ゝ後ゝ方の軍の和ゝ行ゝ廣ゝ山ゝ後ゝ方
ともうんせちゝんとゝく焼ゝ打ゝ出ゝんとゝ寄ゝ来ゝ陣ゝ寄ゝ来ゝ和ゝ行ゝ後ゝ方の
よりけちゝりゝくゝくゝくゝるゝ和ゝ行ゝ後ゝ方の御勢大器敵ゝ成ゝ

あやしも大殿後がうくは御運もさや今日を限と覚くれば某も一番に討死
しくも去年の御厚恩を死後に報じ候んと存じ小山口の攻口より入が滅る年
比の御情のほどもあまりにかたじけなく存候へば今一目御尊顔を拝しまうて今生の御
いとまごひをも仕り候ん為に是まで参りて候と申もあへず将門関て滅の涙を流し
もうまじ候れそうあぐら殊一人討死しそうらく今日の軍に猪苗代にのがれ給ひ候一ト
また御命ながらへて又が行末をも見るの事討死しそうぞ剃髪染衣の身となり
いかなる禅院にも身を隠し父が菩提をも弔ひ又我名の討死をも訪へかしと袂に泣
申さまし候れば貞世をさく…には情さ給やる事彩し…いへども某十三に
て母に後を又貞世御味方に来ぞうより以来御袖の下御膝の辺に生立
し月頃日頃の御厚恩はなに謝しまうべきぞんば何の時をか期すべきにはあらず
よの御寿命の中に快く討死して冥途の御先手を仕り候んと申て席を立ん
としそうし我ね門今志べしと止て自殺をなして三度かうぶけ赤糸の服を

秘蔵しく飼畜てる宿禰毛のあるに今度の鞍置てぞ引せたる貞世さま三代
賜て父攻口に向ひたるを将門あるに其後影を見送りて今生の余波も是と
と思ひたれべきも其将門涙をあへて流しくぞ立るにかく貞世還従
捨去魂の太口に出今賜る赤糸の鎧を着て伴のある打余ふつ白木の弓の
弦をはるを中間よりて世熊と甲を並ん文字の攻口に手て出一枚楯の陰より指
詰く居たる者を拠へたる大将あるは化一ッもあらうとたる矢種もなや
射尽しそれば白星の甲の緒を縮る引まかせ敵陣へ近く急居へ入る
怒ある名家をるは傍らを顧ず膝を組肩をかして同字朋友の笑をとらじ
はるへくあまじとも今と惜し義をも忘まて急敵の流れまでは面て上まふ
も中く無益あまじとも去て先祖といへど不比等の三男より九世の孫武
蔵権守藤原貞世が一子民部大輔貞世生年十九歳武運を泉下に報ぜん
為只今討死するぞ我首捕て勲功の恩に頭まてく引かえたる禄

搦門が
相馬の
内衆
兵大

投棄て童と成り三尺ばかりの大太刀甲の上に額をさしかざし敵の矢石堂々たる
人前後をきせ三千騎ゆく手に拒へる志津（破く入三方へ退捲り八面に切て
まわりける間さしもの猛勢真世が勢に切立られ忽退くを矢ごろ射さうな為
左右なく修人の弟宮一人も残らず討死しく今は真世一人ゆくもとるも素と為る
平頭を獲て今日まぐ射付られ小勝に打てとどうど伏て真世はあるもよれ敵
と引組ぐさ〜ちぐ〜と犯るんとるに上り四つ〜れしともあへく近付て十方より
あの手るでく射々る間程に三所の矢共六面義もものでく打かけた力を伏る
実に立ぐさに成くで犯るる利根平八郎高く首を其戸腰に三
敵に一首の辞世を紙に書て
敵とるど敵とるとるとるんえ信紙祇あざたしく
と仏中の悲涙を述て遣の引合に納る実に奉る勇士艶しく忠操
るるとるるんを思とるる